飛び立とうとする子らと

牛山佐智恵

六月初めのことです。私は年中のKと園内をあちこちまわっていました。Kが行きたがるのは、この子が年少のとき過ごした園舎で、ひとつひとつ部屋を見て歩いては、その南側にある土山に登って遊ぶのが、ここ数日のお決まりのコースでした。「やれやれ、きょうはずいぶん歩いたね」——そう言いながら連れ立って体育館に入ったとき、年長のOが人なつっこい笑みを浮かべて、こちらに近づいてきました。KとOとは、私のところでたまたま一緒に過ごしたことがあるという程度の関係でした。

Kはどうもクラスの子が怖い様子で、もうひと月あまり私のそばで過ごしていました。Kが園内を歩きだしたのは数日前からのことで、その心と体がやっと少しずつ動き始めたと、私も浮き浮きして、この子につき合っていたのでした。

一方Oの方は、このところ思いどおりにならない日を過ごしていました。というのも、Oのまわりでは年中のころからいざこざが絶えず、誰かれとなく手を出すOは

子どもたちから怖がられていたのですが、年長になってからはそれが急にこの子への非難に変わってきていました。

Oがこうして追いこまれることは、私たち保育者もまた追いこまれることでした。当面するいざこざに対処するために、私たちの気持ちは、Oが先に手を出したという事実だけで相手の子の方に傾きがちだったということを認めざるをえなくなったからです。この数日前も私はOと数時間を過ごしたのですが、この子を何とかわかろうと思いながらも、遊びらしい遊びも見つけられぬままでした。ところがこの日のOは、偶然会った私に、自分から遊びを提案してきました。

「ああ、疲れた……」——そう言って私が近くにあったマットにうつぶせになったとき、Oがすぐさま「あっ、飛行機にしよう」と叫びました。思いがけない言葉に、私は何が始まるのかドキドキしながら、うつぶせのままで待ちました。まもなくOは、空気でポンポンにふくらませた長さ二メートルほどの円柱状のクッションを持ってきて、それを私の肩のあたりに乗せると、「これ、羽根」と言ってその一端にまたがりました。誘われるように、Kももう一方の端にまたがりました。ふたりは羽根の両端に馬乗りになった形で床を蹴り上げ、一緒にポンポンと跳ね始めました。

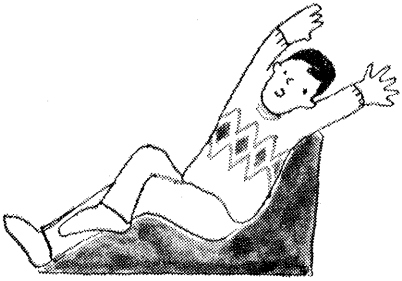
何回かそうして跳ねると、まずKの方が私のそばに寄ってきて、「もうギブアップ？」と頭の上から聞きました。Kはまたしばらく跳ねると、下の私をのぞきこんで、「もうギブアップ？」と聞きます。そのうちにOも加わって「もうギブアップ？」と聞くようになりました。私はふたりからそう聞かれるたびに、「まだまだ」と答えました。私がそう答えるたびに、ふたりは一層はしゃぎながら一層強く跳ねあがり、声をはずませて「もうギブアップ？」と聞くのでした。うつぶせの私にはふたりの様子は見えませんでしたが、その息づかいははっきりと感じとれました。

ふたりがやっと跳ねるのをやめたのは、体中汗だくになってからでした。ことにKは髪の毛までびっしょりぬ

れていました。かぜでもひかせたらと案じた私は、Kに「着がえたら」と声をかけたほどです。

ところがこの直後、思いもかけないことが起こりました。Kは自分のクラスにすたすたと歩いていったかと思うと、一か月以上もなじめなかったのがまるでうそのように、担任の先生や子どもたちと一緒に、さっと庭に飛び出したのです。それは、つい先ほどまで跳ねていた体が、そのはずみを残したまま動いていくといった感じでした。まるで飛び立つようなそのひとときを、私は自分の目を疑う思いで、遠くからながめました。

ところで、このときOが始めた遊びは、マットの上に横たわった私の体を、飛行機の機体にしたものでした。私はただうつぶせのまま、背中の上でふたりが揺らす羽根の振動に耐えただけでした。耐えたといっても苦痛があったわけではなく、むしろふたりが作る振動のままに揺れていたというのが実際のところでした。しかしそれだけのことが、なぜKにとって、これまでかかえてきた恐れのようなものを越える契機となったのか、私には不



思議でした。

「もうギブアップ？」と盛んに聞いたのはKの方でした。Oの思いついた遊びが、Kにはそう経験したことのない手荒なものだったのでしょうか。機体となった私にとっては耐えるというほどでないことでも、その上で飛び跳ねるKには、うつぶせのまま何もしない私が自分より無力なものと見えたのでしょうか。ただ、無力な状態ではあっても、自分のありたけの力を試すのに、そう危げはない相手ではあったでしょう。Kは思いきり自分の力を出し、その力を向けた私に「もうギブアップ？」と聞くことで自分の力を確認していったのではないかと思います。

それにしてもKが思いきり力を出すということは、私ひとりを相手にしていたのでは、まずありえなかったことのように思います。Oの思いついた遊びが、その手荒さゆえにKに思いがけない力を出させ、その勢いに乗って自分が強まっていく体験を引き起こすことになったのではないかと思います。

今思うと、盛んに「もうギブアップ？」と相手の様子をうかがうKの遊び方と、この子がクラスの子を怖がってきたという事実は、無関係ではない気がします。相手の様子を確かめることで自分を確認していくという対応のしかたは、相手の状況によっては不安や恐れにつながることにもなるからです。だからこそKは、うつぶせの私のような相手、つまり自分を脅かすことなく自分を確認できる相手を求めていたのだと思います。

そんなKに比べて、Oの方は相手の状況にはむしろ疎い子です。しかし、Oもまたこのころ、自分を脅かすことのない相手を切実に求めていたひとりでした。

Oは気に入ったものがあれば相手にかまわず手に入れようとするし、友だちが楽しく遊んでいる最中でもひょいと手を出して中断させるというように、頻繁にいざこざを起こします。実際、Oの対応には明らかに相手のじゃまになる位置に足を投げ出したり、相手の動きがまるで目に入らぬとでもいうように、そのすぐ目の前を横切ったりするようなことが目立ってあります。ですから、

たとえ何事も起こらないときでも、衝突の原因になることはいくつもかかえこんでいるように見えるのです。手を出せばいざこざが起こり、その対応を非難されだしたOにとって、たまたま背中を向けて横たわった私の体は無防備で、ちょうど飛行機の機体のように警戒することなく遊べるものであったのかもしれません。

Oはしばらく飛行機の羽根にまたがって跳ねた後は、方形のクッションを持ってきて、それを私の腰の上に乗せました。それはちょうどKが「もうギブアップ？」と私の様子をうかがっていたときのことです。OはKの動きにつられてか、再び羽根にまたがると飛び跳ねることを続けました。

Oの遊びには、Kのように相手の様子を確かめつつ自分を確認していくといった対応は、おそらくそうなかっただろうと思います。それが「乱暴」と非難されるいざこざを生んでいたとしたら、Oにとってこの日のKとの遊びは新しい体験であったかもしれません。私にとってもこの日の遊びは、まるで違う遊び方をするふたりの子の間にあって、本来子どもが大人に求めているものを示唆されたような思いを残す体験となりました。

三日後、Oはビニール袋に手製の手裏剣を十二個も入れて、私のところへやってきました。Oからの初めてのプレゼントでした。